

# ここに帰る

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

ここに帰る

第八十号

令和六年一月一日発行

## 目次

『掲示板』	昭和三十五年五月一日	和田重正
『掲示板』	昭和三十五年五月八日	和田重正
『あしかび』	第一号	和田重正
ま子	昭和四十八年三月特集号	和田重正
白い杖	美しい涙	瀧 久和
やまゝ遊ぶ		柳 鷹烈
なかつ瀬	人類の意思について	山中真知子
見栄についての体験記		大塚 豊之
韓国から		和田重正
ま子	昭和四十八年四月号	和田重正
白い杖	天理に背く	和田重正
やま 4	ゆとりが欲しい	和田重正
「まみず」に出会って	31	山中真知子
自衛戦争		大塚 豊之
後記		44

表紙写真

木曾山脈

長野県中川村大草より  
撮影 平澤正義





日曜の話 五月一日

今日は礼儀に関することを話す。

まず食へ物について、…これははじめ塾では昔からよく話すことだが、…

よその家へ行って何か喰べ物や飲み物を出されたとき、気持ちよく、よろこんでいただくのが礼儀である。

出す方の人は食へさせたいと思つて出すのだからその好意を受け取つて喜んで食へてもらえば嬉しいに違いない。それを、わざと欲しくないような顔をして、いつまでも食へようとしないで、せっかくのおしるこをぬるくしてしまつたり、ラーメンをのびさせたり、アイスクリームを溶かしたりされたら、出した方の人にすれば実に不愉快である。

都会の子には減多にないが、田舎の子にはいまだ

にそういう野蛮な習慣を守っているものがある。ひどいものになると、本当は食へたくせに頑張つていて強く勧められると「きらいだ」とあらぬことまで言つてしまつてついに食へないで頑張り通すほどひねくれた子にもしばしば出くわす。人がせっかく出してくれたものを「きらいだ」と言つて手をつけようともしないとは、こんな無礼なことはない。人の好意はそんなにしてはね返すものではない。多少嫌いなものでも、そういうときは少しがまんして食へるのが礼である。まして、本当はきらいどころか、家だったら奪い合いで食へるほど好きなものを、無理にきらいだとまで我慢する必要がどこにあるのだろう。馬鹿な話だし無礼な話だ。

どうして田舎にはそんな野蛮な習慣が多く残っているのかといえはおそらく、昔百姓が徹底的に搾取（しぼりとられること）されて極端に貧しい生活を強いられたため、食うことに非常に強い関心を持たないでいられたから。それで却つて食へ物に無関心をよそおう習慣が生まれたのだらうと思つ。

何事にでも、無関心をよそおう、ということとは、  
本当は異常な強い関心を持ってしている証拠である。本  
当に無関心ならば決して無関心だということ態度  
や言葉でわざわざ表すものではないのだから。

ともかく、食べ物にそんなにこだわるのは、ガツ  
／＼といやらしいのと同様にいかにもみっともない  
し、人にも失礼なことだ。

はじめ塾の人は、いつもすなおにふるまってもら  
いたい。

次に、自分の家でも、みんな食べているものはこ  
れはきらいだ、と言って食べないのは大変よくない  
ことである。それを作った人はもちろん、一緒に食  
べている人みんなを不愉快にしてしまう。

そもそも、普通の人が食べ、るものを食べられない  
のは、その人の精神のどこかが普通の人より劣って  
いるのである。しかし、異常体質でない限り、普  
通の食べ物は食べられないものではない。それをわ  
ざと食べないというのは実は、その食べ物が本当に  
きらいなのではなく、「お母さんなどが特別な注意を

自分に向けてくれることを期待してあまえている」  
のかまたは「反抗」のためである。要するに愛情の  
不満の幼稚な表現にすぎない。だから、あまったれ  
の極わがままな子は中学三年や高校生ぐらいになっ  
ても、自分の皿に盛られたり、弁当箱に入れられて  
いる「きらいなもの」をわざわざはじき出したりす  
ることさえある。ただ食べないだけでは内心の不満  
がおさまらないのだ。

小さいとき身体の弱かった人やおばあちゃん子な  
どにはこういうのが多い。

しかし、のみ込むことも、口に入れることもでき  
ないほど本当にきらいなもののある人もたまにはあ  
る。それは病気か何か特別な状態のときに経験した  
いやな感じがそのものを見たり嗅いだりするとよみ  
がえってくるのである。こういうものは仕方がない  
から黙って食べないでいけばよい。しかし、普通き  
らいだと思っているのはそんなのではなく、何かの  
具合で一度いやだと言ったのをぐるり人が、「この子  
はやっぱりニンジンがきらいなのだ」などと決めて

しまつて、それ以来しばしばそのように扱つたために子どもが軽い暗示に引っかけかつてしまつたのである。それをまた、あまゝや反抗にうまく利用してやるだけなのである。

きらいなもののある人は、本当にそれがきらいかどうか、誰も見てないところでそつとためしてごらん。食べられないほどきらいな物など、めつたにあるものでないことがわかる。

先にも言つたように、きらいなものが多いということは精神の劣等さを現しているのだから、恥ずかしいはずなのに、子どもの中には、きらいなものが多いことを自慢にしているのが時々ある。昔の高等学校（今の大学）の学生の中にさへさういうものごしばしばいたものだ。その連中を大い田舎育ちで非常に粗末な食へ物で育つてきたので寮の都会風なご馳走に一種の反感を持ったのか、あるいは自分の育ちについての劣等感から出る強がりだつたのだらう。ともかく、さういうくだらないみえをはる者はみんなから嫌われ軽蔑されたものだ。

きらいな物があるのは損である。大人になつて、お嫁に行つたり、お嫁さんをもつたりしたとき、きらいなものはなく、何でも喜んで食へる人は、相手に安心感を与え、信頼感を抱かせることになる。それだけでもたいしたことではないか。

次には、言葉について一つ二つ注意しよう。

一般に言つて方言を使うことは少しも悪いことではない。べゝえと言つたつて別段失礼にはならない。ところが方言の中には、それを他の地方の人が聞いたら非常に不快を感じる言葉がある。使う人は方言として使つてゐるつもりでも聞いてゐる方ではさう思わない場合があるだらう。

小田原の方言の中で、私が今思いつくものをあげてみれば、第一が「やる」という言葉である。はじめて東京から小田原へ引越してきた頃、ある生徒が、

「これ、お母さんが先生にやってくれてよこした」と言つて何かを持ってきてくれたことがある。私は驚いてしまつたが、子どものことだから言い間違え

たのだろうと思っていた。

ところがその後、大人でもこの「やる」を使うのを聞いて、これはこの地方の方言であることを知ったのだが、人に物をあげるのに「やる」といったのではあまりにひどい。「やる」というのは、自分の子どもにだって使わない。犬か、人間ならせいぜいドロボーかこじきぐらいのところにしかな使わない。人を見下した言い方である。

この地方で育った人は別段感じないかもしれないが、他の地方の人が聞いたら本当に怒ってしまうだろう。気をつけなければいけない。

それから、子どもが人から何か聞かれたとき、「知ってねえ」とか「知らねえ」とか答えることがある。

これは、言葉がわるいのではなく、この地方の子どもが言うのと妙な尻上がり調子になって「そんなこと誰が知るもんか」という意味のように聞こえるのである。……みんな自分で使っていて気がついてるか知らずか？

こういう方言的な言い方があることを知らなかつ

た頃、私は、時々

「その返事は何だ、知らなければ知りませんと当たり前前に言え」

などとおこったものだ。今は相当なれたつもりでいるけれど、これをやられるとまたかなり癢にさわる。

これと似たのがもう一つある。

「英文法の講習に出る？」

「うん、やってもいい」

「ハイキングに行かないか」

「行ってもいい」

といった調子の「……してもいい」という答えである。

本当はやりたい、行きたい、のに、どっちでもいような返事をすることがある。

これが方言的な表現であることを知らないうちは、ひどく馬鹿にされたような感じがする。こちらは折角好意を持って、してあげようと思っているのに、まるで気がすまないけれど仕方ないから出席してやる、とか、ハイキングに行つてやるみたいに聞こえるのだからまことに張り合いのないことである。

「こんなあいまいな返事をせず、「やります」「行きます」と気持ちよく答えなければいけない。」

その他まだいくつかあるような気がするが、今は思い出せない。

おとなのページ

投稿歓迎

どなたでも なんでも

## 雑談

いつか何かに書いたと思いますが、私は今こんにち日の世の中の特徴はあせりだと思っています。政治家も実業家もサラリーマンも商人も百姓もみんなあせりにあせているのが実相ではありませんか。文学や芸術をやる芸術家という人たちの中にさえ浅ましいと思えるほどあせている人がいるようです。また、あせている人間をあせらなくする役目を持っているはずの宗教までが、人々のあせりに乗じて、これを煽り、ものの見境もなくなるほど興奮させて見事

に成功をおさめているのですから、たまったものはありません。あやしげな新興宗教の類です。

こういう中で教育だけが超然としているわけにはいきません。今日の教育をよく見てください。小学校から大学に至るまで、なんと息詰まるようなあせりで満たされていることでしょう。

この今日の特徴を持ったあせりは一体どこから生まれてきたのでしょうか。その父はスピード、その母はマスプロ（大量生産）です。

スピードとマスプロは同質の夫婦ですからその特質は加速度的に増幅されて、いよゝゝ人々を狂わんばかりのあせりに追いつんでいきます。

その先端を行くのがアメリカですが、あそこには文明や文化はあるが幸福はありません。日本も遅ればせながら只今懸命にその後を追っているところですよ。

さて、振り返ってみましょう。

一体あせて利益があるのでしょうか。

まず、あせりそのものの中に幸福はありません。

あるいはそこから幸福が生まれてくる可能性もありません。

なぜでしょう。

自分を失ってしまうからです。自覚がなく、ただ外界の刺激に対する反射的な行動を示すだけだったら機械みたいなものです。でも本当の機械ならそれでも文句はありませんが、実は欲もあり感情もある人間であるから困ります。くだらない我ばかりが強くなって幸福の反対の方向にばかり進んでいくことに努力することになります。

あせって利益になることは一つもありません。ではあせらないでいるとどんなことになるでしょう。

まず幸福です。なぜかといえは、落ち着いているというのは英語でpresence of mindと言っ通り、自分を見失わないで事物の本当の味わいを味わうことができるからです。——事物の味を本当に知れば何も、でも驚きでないものはない。楽しい感動に満たされた一瞬一瞬が幸福でないとどうして言えましょう。

物の美しさ、人の心の尊さ、天地の偉大さ、そっ

いうものを深く味わうことができるほど幸福なことがあるでしょうか。人の心の本当の美しさに触れたとき、私たちは「死んでもいい」と思うほど幸福を感じます。

（「そんなことが人間の幸福だとは思わない」と言う人があるかもしれませんが、その人は「いつわらざる自分」「生きている自分」というものを知らないのです。）

まあ思ってみてください。

一万円小遣いを持って、のぼせてデパートを歩き回ると、軒端の柿の若葉のあくのこもった色艶を心に沁みて味わうのとどちらがより幸福でしょう。それから、能率の点からいっても、あせって心がふるえ、手足がふるえるより、落ち着いて、しなやかな心と手足で仕事をした方がずっと能率がよいことは誰にもすぐわかります。

しかし、スピードとマスのプロの世の中に生きていく以上、何か特別な工夫をしない限り（時代の流れにただ流されているだけでは）この禍から逃れるこ

とはできません。

そこで、ある人々は、人間を不幸に陥れる悪魔のごときスピードとマスプロを生み出した科学を呪い、これを否定しようとし、それが不可能であることを知ると、それからの逃避を企てます。それで満足できる異常な人はそれでもよいが、正常な人間にはそんな真似はできません。

われわれはスピードとマスプロの喧騒の中にいて、それに押しまくられ、もみくちゃにされることなく、かえてそれを自分のために使いこなす力を得たいものです。そうして幸福の破壊をのがれ、進んでより高次の幸福を獲得したいものだと思います。

それは可能でしょうか。どうしたらば？  
可能です。精神の集中を習慣づけていけば。

教育について考えてみましょう。

子どもを幸福にしたいとわれわれ大人は強く念願しています。それなのに、世の中一般の子どもは却って不幸の方に押し流されているように見えます。

それは、大人（親や先生など）が、何が幸福かという、しっかりした考えを持っていないことにも半分の原因がありますが、もう半分の原因は世の中全体があせっているばかりでなく教育そのものの仕組みがあせりの表現みたいなもので、その中で長年尻を叩かれる子どもたちはいやが上にもあせりにかり立てられるからです。（この教育組織の中に入れられて全然あせらない子どもは異常な天才か感応力のないバカかキチガイです）

この避けることのできない環境（へいがい）の弊害をのがれさせるには精神の集中の習慣づけより他道はありません。ところが、今日の一般教育の中にはその工夫が全然されていません。むしろ実際には精神の散乱を助長するような内容と方法の教育が実施されています。嘘かどうか、よく観察してみてください。これで子どもが幸福になれるでしょうか。

教育の効果の点を考えてみても、今日の教育によって一体どんな教養が身につくと思えますか。

ものを憶えること一つをとってみても精神の集中



がなければろくに覚えられないものではありません。ただ「勉強しろ」「あれもやれ」「これもやれ」と追い立てられては反抗と無気力とノイローゼが育てられるだけです。

心理学者はこういう事実の指摘はします。しかしそれに対する対策については実行可能なほどには示してくれません。もし学者が示してくれたとしても、それを実行することは、あせっている先生には無理です。——これが現状ではありませんか。

それはさておき、普通の知能を持った人だったら精神の集中させよとできればウソのような桁外れの記憶力を発揮するものです。だから強制やおどしで子どもを追い立てるより精神の集中を習慣づける方がずっと成績を上げることができるとは思いません。「急がば廻れ」とはこの場合最も適切な教訓です。

私の「忘れ方」という記憶方法もこういうところに根拠があります。一度見たり聞いたりしたことは脳のどこか記録されていて、絶対に消えてしまうこととはない。そして、そのことが必要になったときに

は必ず意識の上に出てくるようにできている、というのをよく／＼自分に納得させておく。こうして安心して、一つ一つ忘れながら読んでいく方法。

普通は忘れるということを前提として、忘れはしないかと余計な方に気を散らしているから覚え方も浅いし、必要なとき出てこないのである。

そういうマイナスの自己暗示を取り除くやり方をぜひみんな実行してもらいたい。＊

記憶ばかりでなく、他の知能活動や性格形成についても、およそ精神の集中なくしては教育は成り立たないと言えます。精神の集中なくして精神の感応はない、精神の感応のないところに教育はあり得ません。

それで私は子どもたちに少しでも幸福を失わせないように、精神集中の習慣づけを常に心掛けています。坐禅やなんその法ばかりでなく、日常ちよっとした機会をとらえて、花の色を指し、木の葉をながめ、石ころを拾って、これに注意を集中させる手段を講じています。

うまく集中に成功したときは、子どもはその色、形などいろいろなこと改めて驚きを覚えます。そのようにしていちどその驚きを経験した子は、私の指示に非常によく従ってくれるようになり、別段何も教えないのに勝手に勉強をしてどんどんできるようになります。

ですから——これは蛇足ですが——はじめ塾は英語や数学を教えるだけのところではありません。

私が、学科以外の雑談をしているときが一番はじめ塾らしい教育を実施しているときなのです。

少しの人にも、こんなことを理解していただけたら幸いです。でなければ、好奇心を起こしてくださるだけでもどんなにうれしかれません。

五月四日 和田



### 寄稿

あたりまえの生活

岸 達志

お父さんは毎日会社勤め、お母さんは子どもたちの世話に忙しい。楽しみは時々家中で公園へ行って帰りに映画を観ること。当たり前前の生活、平凡な生活であります。しかし青年時代から最近に至るまで、私はこうした生活に飽き足りなく思っていました。結構には違いない。がそれだけじゃ何の発展もないし、第一人間的な生活ではないではないかと。

もっとも私の知っている一青年も、三十年精勤したお父さんがめでたく退職した時

「親父みたいに弁当さげて出かけては帰ってくる。あんな機械みたいな生活はまっぴらだ。親父もよほど馬鹿だ」

と言っていましたから、私ばかりではないかもしれません。

青年には夢があります。食って寝る、だけの生活

には満足できません。何かこう、夢が、希望が、欲しいのです。自由な生活、美的生活、真理の生活、に憧れて止まらないのです。

そこまではいいのですが、その心の奥に、平凡な市民としての生活、仕事と家庭と隣人とを大事に生きて行く暮らしを、さげすみそして無視する気持ちが潜んではいますまいか。

「おれはこんな虫のような暮らしはたくさんだ」という叫びが、美と真理と自由の世界へのファイトになる限り、その叫びは正しいでしょう。しかしそれはあくまで「なる限り正しく」「いつまでも正しく」はないはずだ。

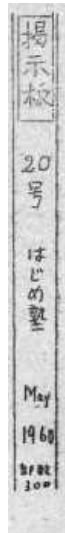
我らは自由な生活を願います。個人からも社会からも解放された自由な生活を願ってやみません。そうした生活こそ、高次な美と心理を具備した真実の生活であるはずだ。しかしその真の生活は、当たり前の生活の不定の上に立つとは考えられません。平凡な生活を軽蔑して何か高い生活を作るといった考えでは真実は掴めないと思っております。

実は最近やっと、私はそれがわかったのです。家中健康で楽しく暮らす。この凡々極まる一市民としての生活こそ最高最尊のものでなくて何でありましよう。

しかし一寸お待ちください。その当たり前というのがくせ者です。お金があると思えば体が悪く、病人はいないけどお金もない。第一祖父、両親、子ども、と完全に揃った家などというものはなかなかないものです。外見上揃っていても、事実上は誰か故障がある、まずそんなものです。そう考えると平凡な市民生活、といっても現実には見出し難い貴いことであると言わねばなりません。そこに先ほどの美とか真理の生活が顔を出す番なのです。平凡な生活は誰もが願う尊いもの、しかし事実よく見ると完全にはなか／＼難しい。生活の完全のみを目指せばおそろく誰もが玉手箱です。歯ぎしり、憤慨、不満だらけです。そこへ、皆さん少しくらい欠けたところがあっても、ちゃんと心楽しい暮らしができますよという役目を持つのが美とか真理だと思えます。

(美と真理の生活とは、充実した生活の上に築かれる面もありますが、それはここでは触れません)

そう思ってみると、手の中にある自分の生活を無視軽蔑しておいて、高い生活、精神の世界、もないものです。まず私は嘗々として一日を送る多くの人たちの汗の暮らしに心から尊敬を捧げ、真実がそこにあることを認めたいと思います。そしていつの間にか自分もまたそのひとりとして、同胞とともに笑い楽しめる時、より高次の世界への道がおのずから開けてくるのだと思ふのです。昭和三十五年五月五日



日曜の話 五月八日

母の日

今日は母の日だからお母さんのことについて話そう。

私は今でも、母のことを思うと、とっても寂しい気持ちになる。それは、私が七歳の子どものとき母を失ったので、その時の悲しさと寂しさが心に深く沁み込んでいるせいだろうと思ふ。

大和(奈良県)の金剛山の隣の葛城山という山の中腹にある大きな田舎屋に、(父は外国に行っていたので)小さな兄弟四人だけ残されたのだからその寂しさといったら今思ってもぞっとするようなものだった。

半年たっても一年たっても、本当に母が此の世にいないのだとは思えなくて、きつと、こんな悲しい夢を見ているのだ、あのお墓だって夢なのだ、そうに違いない、と毎日毎日思っていた。そして夢が、パツとさめてお母さんと一緒に居ることがわかったらどんなに嬉しいだろう、きつとそうなるに違いない、早く覚めないか、どうしたら覚めるだろう。などと考えて、時々指の先に火をつけてみたり、釘で腿を突いてみたりしたものだ。

そのうちに父がアメリカから帰ってきて一高とい

う学校（今の東大教養学部）に復職することになって私たちも東京へ戻ってきたのだが、私が一生で一番悲しいと思ったのはその頃だった。それは…：日曜など外へ出ると、友だちがお母さんに連れられて動物園や公園へ行くのに出会う。私はこれほど悲しいと思ったことはない。そのくせ、日曜や祭日になると友だちの誰かがお母さんに連れられてどこかへ行くのを見つけに行っただものだ。「怖いもの見たさ」という気持ちだったのだろう。

私はこういう風に母がいなかったための寂しさ悲しさを心の底まで味わってきたので、お母さんのある人は本当に幸せだなあ、と思っ。

そこで、私はいつもこんなことを考えている。

一つは、お母さんのある人は、せいぜい甘えるのがいい、ということ。お母さんに甘えることのできる幸福は決して粗末にして捨ててはいけない。二十になっても三十になっても五十になっても、お母さんのある人は心おきなく甘えるのがいい。

お母さんがありながら甘えられないのは、どこか

に間違いがあるのだ。その間違いの第一は「生意気」だ。中学生や高校生ぐらいで、もう甘えられなくなっている人さえある。そんな生チャンなまほど馬鹿々々しいものはない。これは母子ともに不幸である。

甘えることはいいいことだと私は思うのだが、甘え方は年齢によって進化しなければならぬ。中学生が赤ん坊と同じ甘え方をしたのでは、これも母子共不幸だ。

さっき言った「生意気」の多くは親のやり方がまづかったために、子どもが甘えたくても甘えられなくなってしまったのだが、中にはお母さんへの甘えの一種である場合もある。お母さんをわざと心配させて注意を自分に引きつけるという甘え方だ。これは幼児が手足をバタバタさせて駄々をこねるのと同じやり方で、少しも進歩していない。こんな甘え方しかできないのは恥ずかしいことだ。

それから私はお母さんのある人に心から言いたいことがある。

お母さんに一日でも長生きをしてもらおうよう努力

すること。

お母さんが生きていくことができるのがどんなに幸福なことかは、みんなは幸いに、してまだ知らない。だからお母さんというものの命ほど子どもにとって大切なものはない。それなのに多くの子どもは母の命をナイフで削り取るように縮めている。一番ひどいのはお母さんに「くやしい！」というやり場のない思いをさせることだ。子どもが大きくなればなるほどこんな目にあわせることが多くなる。他人なら「勝手にしろ」と突き放すこともできるが相手が我が子である場合にはそれもできない。その度に母は自分の命を五日分か十日分犠牲にしなければならぬのだ。それから、昔から親に心配させてはいけない、とよく教えられる。

しかし、私は必ずしもそう思わない。親の性格にもよるが大抵の親は、よくても悪くても、子どもについては何かがあれば心配するものだ。勉強しても心配、しなくても心配、山に登っても心配、海へ行っても心配——それでは何もできない。

だから私はこう思っている。希望のない心配はさせてはいけない。そういう心配は命を縮めつばなしにする。例えば、不良の友だちとつき合う、というのはそこから何の希望も生まれてこない。こんなことで心配させるのは親殺しである。ところが猛烈な勉強をして大学へ入ろうとすれば親は心配する。体を悪くしないだろうか、落第はしないだろうか。しかし、この心配には明るい希望が伴っている。たとえ失敗しても決して行き詰まりになるような心配ではない。こういう希望の伴う心配はしばらく辛抱してもらってもよいのだと思う。

だからさせていい心配か、いけない心配かをよく判断することが必要だ。

それから、お母さんのいない人もみんなの中にはいるだろう。そういう人は、その大きな不幸を、まかさずに正面からそれを受け取って、じっと耐えてゆこう。人間は大きな不幸の中から大きな力を得るようになってきているのだ。不幸にあった人が損ばかりするようにはなっていないのだ。案外公平にできて

いるものだ。しかし、その不幸を、ごまかそうとして  
気持ちをごくせせたらその不幸は倍加し、不幸は不  
幸を生んでいくだけである。避けることのできない  
不幸は堪えるより仕方がない。では母のない不幸か  
らはどんな力が得られるか。それは第一に、人の愛  
情の尊さを知り、自分が愛の人となる。つまり深い  
深い愛の力が得られる。

悲しむ、愛しむ、どれも同じくか、しむと読む。

最後に女の人に言いたい。

みなさんは、いいお母さんになってもらわなけれ  
ばならない。私は、それをどんなに強く深く祈って  
いるか。良い妻になることも大切だが、それより良  
い母になってもらいたい。子どもを本当に幸せにし  
てあげられるお母さんになってもらいたい。

いいお母さんは、体が健康であること。ところが  
ケチでないこと。つまり、心身が健全であることが  
条件である。

あたまのよいことも学のあることも結構だが、そ

れはよいお母さんのための条件としては第四、第  
五のことである。いくら、東大やお茶の水を一番で  
出たお母さんでも、ヒステリック（これがケチの典  
型）な人だったら母親としては落第だ。

要するに、これから人の子のお母さんになる人は、  
何よりも立派な人間になることを心がけてもらいたい。  
あなた達にとっては「母の日」はお母さんに感謝  
する日であるばかりでなく、「母になるべき自分」を  
自覚するのにも絶好の機会である。

おとなのページ

投稿歓迎

どなたでも なんでも

悠々自適

先日従兄弟の I 夫婦が来て一晩泊まっていった。  
彼は私より一つ年下だが息子を二人持っていて、  
長男が今年早大を卒業して、大変いい会社に就職で  
きたというので一安心したところである。それで長

年の苦勞を慰め合うという意味で夫婦連れで伊豆箱根方面に遊びにやって来たらしい。

この従兄弟は一人っ子だったので中学一年の時から私の家に来ていて、我々兄弟と一緒に育ったのだし、学校を出てからも大ていは私の家の近くにきて住んでいたので四十数人あるいと、この中でも特に親しいところである。だから彼とは今でもオレ、オマエで話をする。歳も近いせいもあって、本当の兄弟よりずっと気楽な間柄である。

そのIと一晩ゆっくりと四方山話をしていると、その話の中で彼が言うのには、

「おれは気楽なもんや。別にこれから出世しようとも思わんし、金をためようとも思わん。息子は一人が安心なところへ就職させてもらったから、もう一人大学を出しさえすれば親の役目は果たせるというわけだ。だから、おれは何もこせ〜せんと、まあ気楽に仕事をして、あとは、テレビで野球とプロレスと相撲を見て、たまに女房と温泉でも出かける。つまり無理はしないで生活を楽しむつもりや」

私はこの善良なるいと、この何の野心もなく本当に満ち足りた気持の表明を聞いて「やられたッ」と思うと同時に心の奥からほほえみが浮かんできた。

「ふーむ、そ〜かい。お前もずいぶん苦勞のし続けだったからな。戦争に行つて死にそこなったり、長い間失業したり、就職したと思つたら会社がつぶれたり。だから今、そのくらい気楽になれてもバチは当たらないだろう。だけど、五十の若さで大した達観ぶりだなあ。そこへいくとおれなんか、ようやくこれから仕事のスタートにつこうというところだから、本当の話、おれはテレビを見るだけの気持ちのゆとりがないんだ」

「エッ？、お前はまだ何かやるつもりなのかい？何するつもりか知らんが、こんな立派な家は建つ、子どもみんなどんどん仕上がっていく、これ以上何する必要があるんだ」

「いや、必要があるわけじゃないが、おれは普通の人より三十年間無駄飯を食ってきたんだ。実際今まで、おれは何一つ仕事らしい仕事をしていない。そ



の点では二十歳の青年と同じことなんだ。それだけでなく、二十歳の青年よりもっと悪いことには、おれは世の中に約束したことがある。それをまだ百分の一も実現していない」

「どんな約束？」

「いや、別に声明を發したわけでも、誰かに言明したのでもないが、自分が大学を出るとき心に誓ったことがある。それを周囲の人々は長い間になんとか察知してくれているらしい。そしてなんとなく何かを期待してくれているのだらう。それでなければ、こんな立派な建物を建ててくれるはずはないからね。

その期待を裏切ることにはできないと近頃ヒシ／＼と感している。だけでもおれは自分の才能に誤算があったことに気づいている。こんな貧弱な能力だと初めから知っていれば、こんな大それた願いは発しなかったのだが。ともかく、こんな貧弱な能力によって、世間から許してもらえただけの仕事を成し遂げるためには、おれはもう少なくとも二十年は、もっとくしくしないで働かなければならない。それもよほど

能率よく、嘗々孜孜として……、お前みたいに自分の生活を樂しむという余裕は、到底持つことはできないだらう。せいぜい疲れ休めに草木や石ころをつかむぐらゐが関の山だ」

「損なただなあ」

「うん」

私はIの満ち足りた今の様子を見て心の底から祝福しないでいられた。それと同時につく／＼と自分のあくせくした日々をふり返らずにいられた。った。

私は今まで出世しようと思ったり、金を儲けて豊かな生活をしようと思つたことは一度もない。だから、そういうことのためにあくせくしたり骨を折つたりしたことは無論ない。それが人間としていいことか悪いことかは簡単には断じられないし、こんな生き方を他の人に勧めるつもりは毛頭ない。ただ私は自分に納得のいく理由があつて二十七歳のとき、ある意味で世を捨て、はっきりと出家してしまつてゐるから、こういう生き方をしているというだけで

ある。

なるほど数年前までの、文字通り飢餓線上をさまよっていた頃は苦しかった。それにもかかわらず私には食うために働こうと思ったことはない。することをしてそれで生かされるだけ生きようと思っていた。大体妻子を自分の力で養おうという意欲も、養っているという意識もついに持ったことがない。その点では完全に無責任であったし今も同様である。

(これを読んだ方の中には「馬鹿野郎／＼なにを寝ぼけているんだ」とどなりたい人もあると思いますが、今は一切言い訳はしないことにします)

そういうわけで、今多くの人々のおかげで何不自由ない物質生活に恵まれ、七人の子どもたちが次々に順調に仕上がって行っても、それによって自分の責任が今更解除されるということがない。初めから背負っていないのだから別段肩の荷が減じたという感じもない。そして、そんなことは無関係に、相変わらず自己と世界の探求への道を吸々として歩みながら、せつない気持ちで更にもう一人の道連れを探

し求め続けているのである。

(これがはじめ塾の仕事の中心である)

全くゆとりがない。野球やテレビを楽しむ余裕がない。家内と温泉に行くゆとりもない。むろん今でも、そうするほどの経済的ゆとりがないのも事実だが、それより気持ちのゆとりがないのである。

——これは一体どういふものだろう。

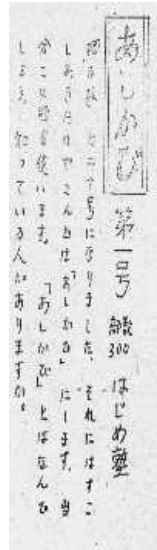
むろん野球やテレビは見なくても差し支えないが I のような気持ちのゆとりは是非とも必要だ。I とは生活の目標が違うから仕方がないといえはそうかもしれないが、自分のようにいつまでも余裕のないことでは、マトモなことはできないのも事実だ。

青梅のような未熟な自分を齒痒く思ふ。

遊戯三昧、悠々自適の境涯は程遠い。

和田





日曜の話 五月十五日

今日は「人に好かれる人にならなければならぬ」という話をするのだが、その前にみんなにちよつと聞いてみたいことがある。

「いつもみんなにあげる『掲示板』を必ず全部読む人」

誰も手を挙げない。中で一人「毎回半分読む」という子がいる。よく聞いてみると「おとなのページ」

は読まないなあだと言つた。

「それなら結構」

「では、たまには読む人」

誰も手を挙げない。

「話を聞いてちやうもん」

などとさきやき合っている。

「それではほとんど誰も読まないんだね」

「では、家持って帰って、お父さんかお母さんか誰かに読んでもらつて」

全員が勢いよく手を上げる。

「ほう、よろしい。……毎週これを作るのは私にとつては大変な骨折りにんだ。話を思い出しながら原稿を書いて、それから謄写版の原紙に写して、刷って、一枚一枚折りたたんで、それをページ順に集めて一部づつ綴じる。こうして出来上がったのにみんなの名前を書き入れ、送るところへは封筒に入れ切手を貼って発送する。

(卒業生その他へも送るから約百通になる)

これだけのことをひとりするのでだからさういふ骨の折れる仕事なんだ。こんなに骨を折って作ったものだから、ぜひみんなに読んでもらいたいと思う」

「ここで話を聞いた人も、話の中身が少し変わっていることもあるし、聞くのと読むのでは、また違う感じを受けることもあるのだから、もう一度読んでもらいたい。

小学生は誰かに読んで聞かせてもらつていい」

「では、みんな（まん中に煙っている線香をさしながら）この線香の火を見つめながら話を聞きなさい」

（一同シーンとして線香を見ている）

人は

みんなから好かれる人にならなければならぬ

はじめ塾では昔から繰り返してよく言うのだが、

これは実に大切なことである。

中学生や高校生ぐらになると、

「おれは人からなんかすいてもらいたくないや」

と、威張っている人がいる。極バカな人は、三十、四十の大人になってもそんなことを言っていて得意になっている人がいる。だが、そんなことを言う人はウソつきだ。自分をいつわっていることに気がつかないバカモノだ。人から好意を持たれていやだと思っ人はないし、人からきざられて不愉快でない人はあるものではない。人から好かれたい、よく思われたいというのは人の本性だ。決して恥ずかしいことで

はなく貴い本性なのだ。自分の本性とか本心とかをいつわってはいけない。自分の本心ははっきりと知って、その本心を伸ばして行くのが正しい道であり、幸福の道である。

みんなは今、こういうことを聞いて、なるほどと思った。そうすれば、みんなは必ず人に好かれる人になる。誰でも自分の本心をはっきり知りさえすれば、その本心の欲するように発達してゆくものなのだから。先ず知りさえすればよい。

では人に好かれるとどんな利益があるだろうか。人から好かれるのはうれしいものだ。それだけだって大した利益である。その上に、好かれる人は、人から何でも頼まれる。子どもでも、物を頼みやすい子とを頼みにくい子がいる。

「ちよつと郵便入れてきてくれ」

「ちよつとここ掃いて」

など、気楽に頼まれる人は好かれているのだ。そうすると、年中いろんなことを頼まれる。えらい損だと思っ人がいるかもしれないが、そこが間違いであ

る。なんでも人から頼まれるような人間でなければ駄目だ。大人になって誰からも用事を頼まれないで年中暇な人間ほどつまらないものはない。そういう人間はいくら学問があっても、金があっても何があっても世間のクズだ。あれもこれも人から頼まれて、忙しがっている人は人から好かれていてる人で、それだけ何かのお役に立っている人だ。こういう人が本当に値打ちのある人というのである。

ではどうしたら人から好かれるかというと、これは難中の難事だが、そのくせ、なるほどと思いきえすればこれほどやさしいことはない。

結論を言うと、わざと人に入られようとして、いやしい態度になったり、気に入られたくないといつて、強がったりしないこと。そして、自分の本心をつつわらないで素直に、まごころで何でもする。

自分の周囲を考えてごらん。大ていの組には、先生に気に入られようとして、わざと余計なことを言ったり、したりする子が一人や二人はいるものだ。そんな子は必ず友だちから嫌われている。おまけに

先生からも「いやらしい子だ」と思われているに違いない。せっかくなりに入られようとして却って反対の結果を招いている。

実はそういう馬鹿らしいことをするのは、何もそういう子どもばかりでなく、大人人間というものはバカなもので、自分の望むことと反対の結果を得るためにずいぶん努力するものだ。たとえば誰でも少しはウソをつく。——バカな人間ほどウソをつく——なぜウソがつきたくなるかというと自分がよく思われたいからだ。それなのに、ウソつきほど人からバカにされ嫌われるものはない。

ついでだから言っておくが、ウソはどんなに上手に言っても、また自分の良心にさえ恥じないほどうまくウソを言っても、あるいは遠くに離れて、まさかこんなことは聞こえまいと思うようなところで言っても、必ずバレるものなのだ。子どもや、大人でも知恵のないは、人間の世の中というものが、そんな風になってきているのだというに気がつかないから、バカバカしいウソを平気で言っが「壁に耳あり

障子に目あり」で、ウソは必ずバレる。ただウソだとわかってても、大ていの場合、本人にわざわざ

「お前はウソをついたナ」

と言わないで知らん顔をしていて、「あいつはウソだ」と心で思っているだけが多い。だから本人はバレていることに気がつかないでいい気になっているにすぎない。

ウソは道徳に反するからいけないというより、私は、ウソは必ずバレるし、バレたら自分が信用を失って大損になるからいけないのだと言いたい。

(だから、バレても差し支えないウソや、バレて却って信用を増すようなウソは少しも悪くないと思う。そついうことだつて実際にある)

ところが人間というものはバカなもので、自分が見られように見られるためや、お金持ちとか善人とかに見られようとしてウソをつく。こんなウソがバレるとまるで何のためのウソかわからない結果になつてしまふ。

私は子どものときすごいウソつきだった。今はめ

ったにウソはつかないけれど、それでもまだたまにはついてしまうことがある。だから私はウソについては非常によく知っている。

ともかく、子どもというものは一般に知恵が足りないからよくウソを言いたくなるものだ。なるだけ早くウソを言わないように、そして人から信用され、好かれるようにならなければならない。

ウソの話になってしまったが、一般人から好かれる人は——自分の知っている人を考えてごらん——みんなわざとらしいことをしない人、つまり虚勢を張ったり、カ<sup>りき</sup>んでみたり、気取ったり、卑屈だったり、そんなことがなくて自分の正直な心をそのままに出して言ったり行ったりする人だと思う。

先に、好かれるには、本心をいつわらないこと、とまごころでものごとをすることが大切だと言った。本心をいつわらないということは、「人から好かれることを欲している自分の心」をゴマカさず、その通りに認め、そしてその心の求むるよう努力するこ

とである。

それから、まごころとは——近頃はあんまりはやらないことばだけど、他に言いようがないから使っておくが——これも真心<sup>まごころ</sup>であって本当の心のことである。しかし、さっきの本心とは少し使い方がちがって、こっちは例えば、人が見えていても見えていなくてもその人のために、自分のできるだけのことをすると、「あの人はまごころのある人だ」ということになる。誠意ともいう。いいかげんにしないことを誠意をつくすとも言っつ。

好かれようとしてわざとすればいやしくなる。だからそんな余計なことはしないこと。自分の本心をゴマかさないこと。まごころで人に接すること。

この三つがそろえば必ず人に好かれる人になる。そして、この三つをひっくり返して、ケチな根性を捨てるということになる。

やさしいことだ。案外に。



おとなのページ

投稿歓迎

どなたでも なんでも

天使とともに

「今日は珍しく差し迫った用事もないから溜まって本を落ち着いて読みましょう」と思って朝から張り切って読みはじめると、九時頃にはもう電話がかかってくる。そんなときに限って二回も三回もたしいた用事でもないのが続いてかかってくる。そうしているうちに誰か訪ねてくる。

「通りがかったから一寸寄りました」

というご挨拶。はじめ、ちょっと困ったなと思っけれど、元来こっちはかなり人が好いとみえて、二言三言何か言っているうちにたちまちうれしくなってしまう。殊に、用事もなしにブラリとノンキな顔をして入ってきてくれるとすっかりうれしくなっていく気持ちで駄弁りまくるのが私の習性らしい。

しかし、そのお客さんの帰った後の惨めな気持ちといったらない。どうせノンキなお茶のみ話だから

威勢ばかりよくて淫も溜まらないような、その場限りの話である。そんなお付き合いに二時間も潰して、と考えるとやり切れない。なんだかバカバカしくて本を読み続ける張り合いもなくなってしまう。そこで食堂の椅子に腰掛けてボンヤリとガス台のまわりや料理台の下の汚さでも観察しているより仕方がない。そのときの私の心は沈うつそのものである。はたから見たらずいぶん不機嫌な顔をしていることだろう。

家内は「触らぬ神に祟りなし」と心得て、その辺でなにかごそごそやっている。――

こういう調子の日が私にはときどきあるのだが、先日も丁度そのような沈うつの中<sup>や</sup>中にいた。

と突然玄関のドアが勢いよく開いて、

「タダイマ！」

なんのブレーキもかからない思い切りの声飛び込んでくる。澄んだきれいな声だ。私は目を覚まされたように、あわてて、

「おかえり！」

と高らかに応じた。私の目にはガス台のよこれはもうなくなっている。私はそのとき大きな声で心からのひとりごとを言った。

「ありがたいなあ。」

間髪を容れず

「どうですねえ」

とそばにいた家内が受け止めてくれた。私の気持ちのはっきりとわかったとみえる。

しかし、しばらくたってから私は念を押すように補足した。

「メダカや猫や小鳥さえ人は可愛がるために飼うんだからね。動物といっしょにしちゃ申し訳ないけれど、よくまあ、あんな可愛い子たちを預けてくださるもんだなあ。こんな有り難いことがあるだろうか」

家内も一言、

「どうですねえ」

と応えたが、その声には無量の感慨がこめられていた。

それから後で私は考えた。「果たして可愛いのだろ



うか」と。

そもそも自分は草木や魚や鳥が大好きだ。しかし私のはどうも、可愛い、ということばで表すような感情とはだいぶちがうような気がする。可愛い、というのは本当はどういうことをいうのかよくは知らないが、自分の花や動物に対する感じには、もっと充実とか重みといったような、生命の中心に近いものが多く混じっているような気がする。それだけに自分とのつながりがずっと深く感じられるのである。

私の感じからいえば、可愛い、という感情はどちらかといえば皮か、せいぜい肉のつながりで、いくらか離れたもの、対象を感じるものから出ているように思う。

ところが、自分の草や動物（石ころでも同じだが）に対して感じる感じ方は、それよりもっと深く皮を超え肉を過ぎ、骨も髄も通り過ぎたところのいのち、としか言いようのないものへの直接の接触から来るとみえる。

自分の子についてはもちろんだが、託されている

子たちに対して私の感ずるのは、可愛さなどという煩惱ばかりではなく、矢張りそのような「何か」なのである。その何かを言い表すことばがないから可愛い、と無理に言うのだが。

私はめったに心から、有難い、と思わない人間なのだが、肩をたたいてもらったときと、草木や動物を買ったり貰ったりしたときには本当にうれしくて有難いと思う。

だが、人間の子どもを預けられるということは、その何百倍何千倍もありがたいことだという当然のことに今頃だん／＼気がついて来ている。

天使にかこまれたくらし、役得とでもいうのか。

（五月十五日 和田）



# まみず

昭和四十八年  
三月特集号

## 美しい涙

この世に、くやし涙、悲哀の涙は減らないが美しい涙はなくなってきた。

昔は幼稚園や小学校の運動会は大人たちの美しい涙の場だった。今の運動会では涙が出にくい。ひたむきな若者の純情は大人の涙を誘ったものだ。親子の間、師弟の間に美しい涙が溢れたものだった。懺悔の涙。感謝の涙も美しい。美しい涙がセンチだとして嘲笑わらわれる世の中の浅はかさをどうしよう。

白い杖  
26

やま 3

## 遊 ぶ

和田 重正

(小田原はじめ塾)

この話は自分にはまだ語る資格がないと思っているので今までも誰にも話したことがなかったのですが、先日「人間のための教育」研究会の総会のとぎ、機関誌「かなめ」二号の特集、「教科の教育は人間にとってどういう意味をもつか」に集録されたエッセーについて話し合っている中で私は自分自身に抵抗を感じながら、

「四十年来自分は子どもたちの勉強を遊びにすることを理想としてき

た」と言ってしまうました。これは私の本音なのですが、本音を吐くには現実があまりにかけ離れていることを承知しているのです。

どうしてこんなことを勉強指導の理想としてきたかと言うと実は昔自分が「如何に生きるか」を思い詰めた挙句に到ったところが一つの言い方をすれば、遊びだったのです。三十歳より少し前ですが、その頃に私は「遊ぶんだ。これから遊び以外は一切しないことにしよう」と心にきめました。それはつまり損得や体裁や権利義務などを動機とすることはやらない。自分が本当にしたいことだけをやるという意味ですが、しかし、遊びをこのように分解してしまうともう遊びの実質がなくなってしまう

気がします。ともかくそれ以来自分の生き方として遊びを理想としていますので、子どもたちの生活もすべて遊びにしようの一番よいと思っているわけです。幼児が、欲得も他人の評価も気にせず砂遊びや積木に熱中するように、学童・生徒は教科の内容を玩具にして遊べるようになれば、こんな結構なことはないと思うのです。

これが少しでも成功すれば知育の能率もどのくらい上がるか知れません。——むろん能率が問題ではないのですが。——脅したり、一ぱい喰わせたりしながら知識の詰め込みの手段方法の研究ばかりしているのは知育の能率だっ得上がりはしません。

しかし、こう思うものの、現実

はどうでしょう。四十年間わが塾で勉強の遊戯化を目指してきてもそれがどれだけ実現できたか、それどころではなく自分自身の生活さえも遊びに徹することがどれだけできないかと省ると、他人様ひとさまに向って大きな口を叩く勇氣は絶対に出てきません。それでも尚あらゆる打算を超え、我を忘れて単純に遊ぶ遊びほどよいことはない、という考えは改めることはできないのです。そうすることがよい結果を生む、ということではなく、そうすること自体がこの上もなくよく生きることだと思ふのです。

こんな議論をここに書くつもりはなかったのですが、誤解を惧れて一つ付け加えておきます。それは勉強を遊戯化するとか、生活を

遊びにするというのは、授業をゲーム化するとか家庭や職場にパソコン台を置いたり、取引きをジャンケンできめるなどとフザケ半分にするのではないということですが。そんなことは当たり前なのですが、実際に学校その他で行われている工夫はそのような方向への努力のように見受けられることが多いのでこの断り書きもあながち無駄ではないと思います。

それではこの私の理想とする遊びとは何であるか、ということになると力量不足の私にはそれを積極的に説明することはできないので、もっと遊びを実現できている人にお願ひしなければなりません。そんなむずかしい話は別として、私は人間以外の自然はみな遊びを

しているように見えてしまうがなのです。山も海も雲も泉も流れも鳥獣も虫も草木も、それら一つ一つが全体の中で何かを力いっぱい、ただ無心にやっています。その有様は幼児の積木遊びと同じです。打算がなく、結果への危惧がなく、木を積むこと自体に全力を打ち込んで、満ち足りて安らいでいる。——でも安らぎとはむしろただの静止ではありません。不動であり緩かな動き、激しい活動、時には暴にまで発動するエネルギーの真剣な充実がなければなりません。フザケ半分やゴマカシや無気力の放心には安らぎはありません。私は山の刻々に移り変わる姿や、雲の流れの中に深い深い安らぎを感じます。真暗な山中の夜空に北

斗七星を仰ぐときも同じです。

私たちの山の寮のすぐ上に神社があります。由緒ある神社ですが、今はわれわれの合宿の期間以外には殆んど訪ねる人がありません。この神社の境内には樹齡何百年という杉や樺の大木が茂って森を作っています。その登り口から境内へかけての自然を語りはじめたら半日しゃべり続けても私は満足しないでしょう。それほど自然が充満しているのです。四季折々の草木の様子、そこに住む動物たちのこと、土の色から、石ころのたたずまい。その一つ一つについてどんなに熱心に語っても語り足りることがないような気がします。だから私はいつも黙ってこらえているのです。みんな遊んで

いる。安らいでいる。そう思っているだけです。

人とは全く関わりのない山の草むらに独り芳香を放つ山百合の華麗な花に出会うと私はいつも「ああ、遊んでいるナ」と強く思います。こんなに手放して遊んでいいのだらうか、と心の中に頭を上げる疑念を自ら打ち消そうとするのです。

数年前の夏の早朝、少年が二、三人息せき切って駈け降りてきて窓の外から叫びました「先生、へんなものがいます。バケモノみたいな！」

私は「どれ、どれ」と言いながら彼等の後について神社に登り、社殿の脇の森の一本の杉の木の中程に止まっている奇妙な動物を見

ました。全身明るい灰色の柔かい羽毛で覆われた、大形の鶏ほどの鳥です。顔の形からみるとミミツクの類のようです。すぐ木の下まで近づくと気配を感じたらしく体の姿勢を変え不安げな様子を示しました。

これは後で図鑑で調べるとオホミミツクという鳥であることがわかりましたが、それを見たとき私は「何のわけがあつて、こんなところにこんなものがあるのだらう」と、疑念を發し、そしてすぐに「遊んでいるんだ」とそれを打ち消したものです。道で子兎を見かけるときもいつも同じことを経験します。もう一つだけ。

朝の掃除に神社へ登ったときです。誰かが大声で呼んでいます。

行ってみると拝殿の前の石灯籠の土台のところにナナフシがノソノソと動いていました。カマキリをできるだけだらしなく引き伸ばしたような手足と体をゆるゆると動かして昔の上を<sup>は</sup>逼っているのです。はじめてこの昆虫を見た人は誰でも、これが健全な一匹の動物であるとは思わないでしょう。何かの奇型だと思ふに違いありません。子どもが奇声を發するのは無理もありません。

でも、そのことは別として、私は、訪ねる人もない山の中の神社のこんなところで何をしているのか、ただノロノロと手足を動かして、しまらない不態な体を運んでいる不気味な虫を見ると、「これは遊んでいるんだ」というところに

落ちつくまでは、こっちが安らげないのです。

「ケチ落とし」の崖の下の小さな小さな泉とも言えないほどの小さな水たまりにサワガニが昨年無数の子ガニを生みました。なんという悠々たる営みだろう。ああ、そうか、遊んでいるのだなあ。私は遊んでいるということを通潤にもすぐに忘れてしまいます。

私が忘れても自然はみんな遊んでいるのです。生の営みを遊びとして真剣に力いっぱいやっているのです。打算と勝敗と見栄・外聞とに関わりなく、自分がただ自分として、自分を安らぐように活動しています。

もしわれわれが自分の生活を悉く遊びにすることができたら、そ

れこそ至福を得たということになるでしょう。

ところが人間の子は幼にして積木を積むと、はたからほめられ、早々他人の称賛を期待するように躰けられ、少し長ずれば打算と勝敗の中に投ぜられ一切の遊びを取り上げられるのが常態です。

文明国の、否日本の学校というところはどんなところでしよう。日本の会社・役所・つまり日本の社会はどんなところでしよう。

一切が打算と勝敗に賭けられています。本来遊びである筈のことさえも、打算と勝敗の中に投ぜられ、心からの安らぎをもたらすことができないことが多いのではないのでしょうか。学校、職場、家庭そのいずれにも安らぎのない人間

は神社のナナフシより遙かに浅ましい動物ではありませんか。

人間が本当に人間であるのにはせめて生活の一部には遊びがなければなりません。赤ん坊から百歳の老人に到るまで、それ相応の遊びがなければなりません。もし勉強から労働に至るまであらゆる営みを生の営みとして遊びとすることができたら、その人は人中の真人だと言われなければならないと思います。

むしろ、遊びは外の条件によって実現するのではなく人がそれを遊びにするか否かによって決まるだけです。

では遊びの要領・或は情報というものはどこで、どのようにして手に入れることができるのでしょうか。

私は自分の塾で、できる限りの工夫をこらして子どもたちにそれを得させようとつとめてきましたが、自分自身の生活の不徹底さや無力のために見るべき成果は挙げられません。たとえ或る程度勉強や労働を遊びにすることができても、学校の門をくぐると同時に遊びはどこかへ吹き飛ばされてしまうのが現実です。無力を痛感するばかりです。

しかし自然は最も偉大なる遊びの教師です。この教師の中に身を沈めて遊びの真髄を味わうことができれば、たとえ学校や社会の無法な攻撃を受けても遊びを奪われることなく、打算と勝敗の支配するその中の営みさえもそのまま遊びとすることができるとしよう。

大人も子どもも文明人は時々自然の中に素直な態度で戻らねばならないゆえんです。自然を離れ遊びを忘れたら人間は狂って滅びます。

### なかつ瀬

読者投稿欄

(文を一部割愛しています…… 学芸会担当)

### 人類の意志について

瀧 久和

昨日一心会が開かれた。

テーマは「人類の意志について」

参加者は約十五名。武者小路実篤の同名の著作を種本として話し合った。

「人類の意志」という氏独特の言

葉をもってあらわしているものは、目に見えるというでなく又手に触れるというものでもないが、しかし確かに実在する。実在という表現が妥当でないならば、確かに実感できると言ってもよい。ともかく氏が人類の意志と名付けたある意志によって我等は生かされている。人類の意志なるものの実在を論理的に証明することは難しいが、しかしそこに人類の意志が働いている、我等を懸命になって生かしたがつているものの存在を感じざるをえない、というような現象は到る所に充満していると思う。我等は健康を損なった時、苦痛を感じる。もしもその苦痛を感じないならば、我等は健康を回復させる努力を怠り、益々健康を損ねてゆ

くだらう。肉体に苦痛を感じさせられることによって、健康を回復しようと努力することになるわけである。時には耐え難い程の苦痛を感じさせられることがある。しかしそれだけ一層我等を強く生かしたがっているものの愛を感じる事ができる。子どもが病気になる時の親の心配は大変なものである。そして子どもが死んだ時、親は正視出来ぬ程歎き悲しむ。しかしそれほど強く、人類の意志は親を子どもに執着させ、子どもをこの世に生長させたがっているのだ。逆に子どもが立派に成長する時、親は喜びに満たされる。この時人類は喜んでゐるのだ。人類の意志は確かに我等を生かしたがつてゐる。

ところで自分は一体何故にこの世に生み出されたのであろうか。それは人類の意志を生かし、人類をして無限に成長させてゆく為であると思ふ。しかし、この自分が生み出されたのはなぜだろうか。必ずこの自分が生み出されなければならなかったのだと言えるだろうか。そうは言えないような気がする。父と母、その又父と母、そしてその又父と母、とさかのぼって考えれば、そしてさらに人類以前の段階にまでさかのぼって考えてみれば、その間のたった一回でも欠けていたら、この自分は生まれてはいなかったのだ。しかし又、この自分は生まれるべくして生まれたというのも事実だ。だからとても不思議な気がする。

自分が生まれたのは偶然と言えるかも知れない。しかし、誰かは必ず生み出されなければならなかったのだと思ふ。人類の意志を生かす為に。そしてたまたまこの自分が生み出された。人類の一員として、自分が人類の意志に逆らつて生きれば、人類の意志は悲しむに違いない。しかし人類の意志に忠実に自分を生かし切れば、人類の意志は歓喜するだろう。そして自分も喜びに満たされるに違いない。自分は人類の意志に忠実に生きたい。

武者小路氏は人類の意志を包むより大なる意志を「自然の意志」と呼んでいる。神の意志、あるいはのちの働きと言つてもよいと思ふ。その自然の意志の人類にお



ける発現が人類の意志なるものなのだと思う。けれども自然の意志

や神の意志は自分にはちよつと大き過ぎてボンヤリしてしまふ。自分には人類の意志ぐらいがちよつと適當だ。自分は「人類の意志」という言葉を聞くと身がひきしまり、心が充実する。怠けてはおれないという気になる。これまで漠然と感じていた人生の方向をこの言葉が余すところなく的確に示してくれるからだ。これまで抱いてきた人生観の内容に何一つ新たなものがつけ加わるというわけではないが、「人類の意志」という言葉がその内容を実にうまくまとめて見せてくれるのだ。ねらい所がずいぶんはつきりするのだ。自分はこの言葉を見つけてとても嬉しい。

武者小路氏にはお礼の言いようもない程だ。

「人類の意志」は自分にとって明らかな導きの星となった。人類の意志に忠実に生きたいと思う。人類を向上させる為に自分を最上に生かし切りたい。

「自己完成」人類の向上（完成）を生活理想としたい。

自分が生き、人も生き、そして人類が生き、無限に向上してゆく。そんな世界を創造するために微力を尽してゆきたいと思う。思つてみるだけでも心楽しいことだ。何と生きがいのある人生かと思う。こんな喜びの人生を与えてくれた父母にはいくら感謝しても足りないと思う。そして、それ以上に自分に自然の愛を感じることがで

きる。人類の意志にあくまで忠実に生きたい。

不急ノ不急ノ・大願成就

見栄についての体験記

柚木茂子

「見栄」は「他人」があつてこそ生まれるものだといわれる。そして他人を意識すればする程「見栄」の規模も大きくなるのだと私は考える。

小学校の時の私。クラス委員にいつも選ばれる。みんなからは一目置かれる。所謂優等生タイプと思われていた私だった。クラスの中友だちからそう思われる環境の中でいい気になっていた。そのよう

な私が、今でも心に残るような失敗をした。小学校五生の時であった。

その日、私は教室のおそうじ当番であった。黒板をふき終わり、黒板の横にある先生の机の上をふいていた。その時機の上ののっていた出席簿がよこれていたの、なんの気なしにぞうきんでふいてしまった。そしたら黒い表紙の上で「出席簿」と書かれています。文字がさっと消えてしまった。何もしないでそのまま先生のところへ持って行ってしまえばそれでよかったのである。しかしなぜか私はいかなくなかった。そして胸をびくびくさせながら、チョークで「出席簿」と書いてそのまま机の上に置いていたのである。その後、みんなのいる教室で、

「出席簿をこのようにしたのは誰だか手を上げなさい」

と先生がおっしゃった。だが私は手を上げられなかった。

「どうせあとで字を調べればわかることだ。正直に言えば先生はしからない」

などとおっしゃっていたが、どうしようも言えなかった。

これがしょっちゅういたずらして先生にさらけられている人だったら、素直に手をあげられたかもしれない。しかし、このようにみんなの前で過ちをいわれて、立たされて、さらけられるなど考えられてもみなかった者にとってはそれは恐ろしいことだった。一番恐ろしいと思ったのは、クラスの友だちのおどろきだったかもしれない。

「見栄」についての体験記を書こうと考えた時、なかなか思いつかず、ふっと気がついたのがこのことであった。みんなから一目置かれていた私が、みんなの目が恐ろしくて、ついに自分の過ちを言い出せなかったという、今考えればたいへん幼いことであるが、やはりこれも「見栄」の一種ではないかと思えるのである。

「見栄」は自分をかざることと単純に考えた時、私はクラスの者が私をこしらえていたあるイメージに圧迫されて、そのイメージをかなぐり捨てることができずに「見栄」をはったと思うのである。

世の中をながめてみて、大臣や金持ちとかその他世間から注目を集めている人程「見栄」をはる場

合も多いと思う。又、学校の先生などのように、世間で作られたあの種のイメージに押されて、「見栄」をはらざるを得ない立場の者もたくさんいる。

「見栄」のない人間になるなどということは、社会の中にくらしている以上とっても無理なような気がする。

韓国から

柳 鷹烈

東井先生の『子どもを活かす力』は同職者として実に感銘深く拝読いたし、且つ考えさせるものがありました。特に、東井先生の「今が本番」には全く同感です。小生

教職に就いて三十年、今漸く本物の教育のあり方に気がつきつつあります。

そして、和田先生の「不問収穫 只問耕耘」の本当の味わいを感じることができるところでもあります。

まみず会員も除々に増え、着実に日本全土を潤しつつあるを拝見して、同慶にたえません。

日本では高度の工業化、高度の繁栄のための公害、それに青少年の浮薄。「家栄えて児孫おごる」の諺にもれず。

心ある方の歎きを聞きながら、こちら韓国ではこれから工業化と繁栄に向かって爆進中です。国は繁栄しなければなりません、公害はさげたいものですね。

## ある日の一心寮

南の家  
書斎のこたつにて



# まみず

昭和四十八年  
四月号

白い杖  
27

やま 4

ゆとりが欲しい

## 天理に背く

和田 重正

(小田原はじめ塾)

天理に背けば、その歪みのエネルギーは怒りの焰となって爆発する。

地上に生を享けたものの共通の場を、限られたものの恣意にまかす土地の私有制度ほど天理に背くものはない。

今は土地さえ所有していれば、どんなバカこともできる。持たぬものにはどんなヨイこともできない。

この大きな背理によって、どんなエネルギーが蓄えられて  
いるか。

文明社会というものは、なんと落ちつきがなく、せからしいものでしょう。毎日の新聞やテレビに出て来ることでホッと息を吐かせてくれることはめったにありません。国際間の紛争や掛け引き、外国為替の大変動「黒い九月」の行状、もっと身近かなところでは、土地を皮切りとする物の買占め買占め買占め、理不尽な物価の急高

騰、自然破壊と公害、怪我人の出る国鉄の順法闘争——誰がいいのか悪いのかは別として、ともかく

人の心を締めつけたり、ジリジリさせたりすることばかりです。その世の中に学校とう困いがあってそこに大勢の子どもや青年が収容されています。しかし、その特別集団の中の生活も、一般社会と異らず或いはそれ以上にせからしさに支配されているようです。

先生は先生たちの中で、見栄を張り、利害を争い、生徒はその仲間で成績を競っています。それに父母の欲が噛み合って事態を一段と息苦しいものになっています。

こういうせからしきにはかり追い廻わされていて、人は正しい判断の元になる正しい心の姿勢がで

きるものだろうか、と疑わざるを得ないので。いや、これではダメだと思つたのです。

私は子どもや青年たちの様子を見てつくづく思つたのです。「ゆとりが欲しいなあ」と。彼等の半分は全くガツガツしています。負けまい、落伍すまい、と思つてまわりの様子ばかり気にして、年中気が気ではありません。

もう半分は、「ガツガツせよ」という親や先生の要求に応じきれないで、ポーツとその日その日を過ごしている人たちです。これはガツガツではありませんが、ゆとりがあるというのでもありません。これは緩ゆるんでいるということです。緩んでいるから何に向かっても調子の高い反応は起こしません。半

分睡っているような状態ですからロクなことではできません。

何が原因でこのような半睡族が多発したかと考えてみれば、要するに、点取り競争には不向きな子どもに、構わず一律なコースを与えて、この点取り競争に勝つだけが人生の目的であるように思わせた親や先生に責任があると思います。「どうせやったって親や先生が満足してくれるような点は取れないんだ」と少し利口な子なら気がつくでしょう。しかし、点取競争から完全に出てしまうことはできないから、適当にブラブラやっているとうちに学校という困いから卒業させられてしまふ、ということだと思えます。

それはさておき、私が「欲しい

なあ」と思うゆとりとは何なのでしょう。実は私自身にもこれと指摘することができないのです。ゆりみではないことは前に述べた通りです。それでは緊張かと言え、確かに緊張も含まれています。しかしそれだけでないことは、競争意識をもって何かに熱中しているときは大いに緊張しているでしょうが、それはゆとりのある状態とは言えません。

私がゆとりと思うのは、例えてみれば、器に盛られた水のような状態のことです。表面張力で隅から隅まで一様にピンと張っているがシャチコ張っているのではなく、どんな力に対しても即座に反応し形を変えることができます。別の言い方をしてみれば、眼と耳

をからだいっぱいにかけて心が平になっていく状態とも言えます。

要するに、安らかで、しかも一様に緊張が行き渡っているのをゆとりのある状態と私は思っているわけです。

このような意味のゆとりが子どもや青年になくて、年中ガツガツしているか、それでなければボウツとして過ごしているとみんな精神的なカタワになってしまいます。

だからいま青少年にとって最も大切なことはゆとりを持たせることだと思えます。

どこの町にも「青少年健全育成協議会」というのがありますが、青少年を健全に育てようとするなら何よりも彼等に心のゆとりを持たせる機会を与えなければなりません。

遊びや行動の一つ一つについて、それは健全、これは不健全と判定し、健全を採り、不健全を捨てさせよう、とするような姑息な手段で健全育成の目的が達せられないのは誰でも経験上知っていると思います。本当の健全さは、心のゆとりから自然に出て来るものだと思います。

それでは、そのようなゆとりを如何にして青少年の心の実現させることができるでしょうか。

大体このような意味のゆとりは損得や勝敗のない、いわゆる「行」によって最も効果的に得られると思うので、坐禪、静坐、念仏、読経、お祈り、みそぎ 禊、大極拳などを機会ある毎に繰返えし続けさせるのがよいと思います。しかしその

ようなことをする縁がなければせめて、彼等を自然の中に放つてやりたいものです。山でも空でも海でも草木でも自然は自<sup>みずか</sup>ら安らぎ、しかも一分の隙<sup>すき</sup>もなく常に氣力に満ちています。小さな掛け引きややりくりはなく大きないのちの流れのままに力いっぱい生きていきます。この大自然の中に人間の子が放たれば何の教訓を垂れなくとも、ガツガツは自然にきえ、ポーツとした半睡からは目覚めてゆとりを取り戻します。

自然と「行」を合わせれば効果が相乗的になることは当然です。青少年健全育成のためには、キメ細かな方策が協議され、或いは偉い人の有益なお話を聞かせたり、健全娯楽を奨励したり、いろいろ

対症療法的なことが試みられますが、もう少し根本的なところに目をつけて、彼等に心のゆとりを取り戻させる具体的方策を実施してもらいたいものだと思います。

例えばせめて一学期に一度づつでも、一週間ぐらい、すべての日常生活を捨てて自然の中に入り、自然に同化する機会を持たせるというようなこと。——こんなことはやる氣にさえなればできないことではない。「学校はどうする？」とんでもない。学校なんか休ませればいい。

これはどんな大きな犠牲を払ってでも実行するに値することだと思つのです。——この辺のところから手をつけないと、今日救い難いまでに深刻化している教育公害

や人間社会の行き詰まりを打開することはできないと思つのです。

陰鬱<sup>いんうつ</sup>でジメジメしたり、勝気でトゲトゲしたり、捨て鉢でポーツとしたり、いろいろな不健全が青少年を蝕んでいます。その根治法をみんなで真剣に工夫しなければならぬと思います。

「まみず」に出会って 31

山中真知子

にっこり笑う

初めての孫は男の子でした。周りの人からは孫ほど可愛いものはないと聞いてはいました。

確かに腕の中で眠るこの子を見ていると我が子の可愛さとはまた違う感覚の愛おしきです。只々幸せな人生を送って欲しいとの願いだけしか浮かんできません。娘がお母さんになり、私はおばあちゃんになりました。命がつながったなあという実感がしみじみとわいてきます。

私は自分の子どもがおぎゃあと産声を上げた瞬間にいつも感じたことがあります。それは、子どもと一緒に自分も新しく生まれ変わったように感じたことです。新生児と共に自分も新生といた心持でした。この感覚は五人の子どもどの子のそうだったなあと懐かしく思い出しています。あの産声ほど力強いものはないと思います。

あんなにも純粹な、誰にもはばかることのない大きな産声は強さ以上のすがすがしきさきさき感を感じます。十か月近くお腹にいて自分の身体と一体であった命が自分の身から離れて新しい命として誕生する第一声として最高の声だと思えます。生前に父がよくこんなことを言っていました。

「子どもは生まれてきた時に全部親孝行をしている。生まれてきただけで親孝行だ」と。私の父は一人の孫の顔も見ることなく亡くなりましたから、生きていたらやはり同じことを言っただろうなと思います。あの天地いっぱい産声を聞いただけで確かに十分すぎるものを親としあの時にもらったようにも思います。

そんなことを思いながら孫を見ていると、何かを思い出したかのようになんわりにつこと笑います。体中に暖かいものが流れるような笑顔です。まだ目もはっきりとは見えず、耳もまだはつきりとは聞こえないこの赤子の笑顔にただ見とれてしまいます。産神様があやして笑わせているのだそうです。

まだ神様と繋がっているのでしょうか。赤ん坊のふんわりとした笑顔を見て感動していると、ふと思いついたことがあります。それは若い頃、自分はどう生きていったらいいのだろうかと真剣に悩んでいたころに出会った言葉です。「拈華微笑」お釈迦様が捻って差し出した華を弟子の迦葉だけが莞



爾として受け取ったというよく知られた故事です。初めて目にする莞爾という字でした。にっこりと笑うさまであることの意であり、言葉を紹介しないで心が通じ合う以心伝心の例えであることを知りました。

私はこの言葉の意味をそのまま簡単には理解できず、「うーん？こんなことがあるのだろうか」と随分と長い間、頭と心の隅に残り続けることになりました。この言葉を思い出すいつも浮かんで来る想像の映像があります。お釈迦さまと迦葉のこんな姿です。お釈迦様は立っています。下に向けて迦葉に華を差し出す手だけが見えます。迦葉が跪いて両手を掲げてその華を受取っています。もうすで

に迦葉は華を受取った後なのでにっこりと笑うさまはわからないのです。この二人が言葉を交わさないでも通じ合えたことを誰が見てそう思ったのだろうかと考えてしまいます。いったい誰が見ていたのだろうかとあれやこれやと頭の中で考えてしまいます。

普段の生活の中では、例えば喜代志さんがふと顔を上げた時など「あっ、お水？」と察知して「よくわかったね」と驚いた顔をされたら大当たり。

「いや違うんだ」と言われたらはずれです。これは以心伝心もどきとなるでしょう。大当たりの時などはやっぱり夫婦も長く一緒にいればこういうこともあると、ひそかにほくそえむと

ころです。しかし、この笑みは迦葉の莞爾とした微笑みとはほど遠いものでしょう。私の疑問は、お釈迦様は迦葉の微笑みを見てどうして何も言わなかったのだろうか。どうして伝わったことが分かったのだろうか。ということ。もうこれは疑問を通り越して屁理屈です。それでも頭の中でこねまわしているうちにあっ！と気づいたのです。お釈迦様がどうして言葉を発しなかったか、その理由が分かったような気がしたのです。見当違いなことをと言われそうですから笑いながら聞いて下さい。

迦葉が莞爾としてほほ笑みながら手を差し出したその瞬間に、お釈迦さまは邪気のない迦葉の笑顔

を見て誰よりもお釈迦さま自身が一番感動したのではないでしょう。赤子のような笑みを見たお釈迦さまが何よりも嬉しかったのではないだろうかと思つたのです。

誰かがその様子を見ていての「拈華微笑」の言葉ではなく、お釈迦さまの感動の言葉だったのでないかしらという思いに至つたのです。長年、頭の隅でもやもやしていた霧が晴れたようになってすっきりとした気持ちになりました。

孫のふんわりと笑つた時に受けた自分の感動からこんなふうに気づかされたのです。

孫は迦葉ではなく、もちろん私はお釈迦さまではないけれども、産神様が笑わせた孫の笑顔を見ていたら言葉はむしろ邪魔で必要が

なく、体中にめぐる暖かいものを静かに味わうだけで心が通い合つたように思います。

その後も孫が生まれて、私はこの子を含めて七人のふんわりと笑う笑顔に触れる幸せな時間をもらうことになりました。

長女は三人の子どものお母さんとして日々奮闘中。初めてのこの孫はもつすっかりと大きくなって今春から大学生になっています。

あの小さかった孫が、と感慨深い時間の流れです。

息子たち三人もお父さんになって子育て真っ最中です。

三人の子育てを見ていると、面白いことに気づきます。長男も、次男も、三男も、どの子もお嫁さんに對する接し方が、私の子育て

中に喜代志さんが私にしてくれた心使いと全く同じように接しているようにみえるのです。子どもたちには何かあしなさいとかこうしなさいとかは言ったことはないのにと不思議に思います。言葉で伝えなくても自分たちが育つた家の雰囲気当たり前のように伝わつたのでしょうか。五人の子育てを

日々忙しく過ごしてきた私と喜代志さんの姿を子どもたちは見てくれたのだと驚くばかりです。

長男は、お嫁さんが出かける用事がある時など、大きな赤ちゃんバッグを抱え乳母車を押しながら我が家へやってきました。

次男は、仕事に行く前に洗濯を済ませジャギーのお昼にすぐ食べられるようにとお弁当も作って出

かける毎日です。お嫁さんが、「お母さん、さとは私が洗濯できませんからしなくてもいいと言うのに聞きません」

と笑って知らせてくれます。次男は自分がいないときにゆつくり子どもの世話ができるようにとの思いのようです。

三男も洗濯、ご飯作りはお手のものです。我が子が可愛くて仕方がないといった感じで、

「ああ、おれに母乳がでたらなあ」と言うのを聞くともう大笑いです。三男の子どもはまだ小さいのですが、上の孫たちはみんな大きくなって、なかなか今は会えません。

この子たちがまだ小さかった頃我が家へ遊びに来る時は、喜代志さんは前もっての準備で大忙しで

した。いくつかのお菓子を買ってきてこまこまと小袋へ仕分けをしていました。孫たちは来るたびにじいじからもらうこのお菓子の袋が嬉しくて大喜びです。あれやこれやと袋詰めしている喜代志さんが一番嬉しそうにみえるので、私はノータッチです。

大学生になった孫がまだ小さかった頃に、こんなことを言っていました。

「ぼくは大きくなったら、じいじみたいな、じいじになりたい」と。

でもこの孫がじいじと呼ばれる頃には、私も喜代志さんも、もう見ることはできない勘定になるなあとちょっと残念です。

## 自衛戦争

大塚卿之

「ウクライナは、自衛のための戦争もすべきではない」

わたしのこの考えは今も変わらない。

二〇二三年八月時点でのロシアとウクライナ双方の死者数は、合わせて約十九万人。すでに広島原爆死者数を超えている。

戦争は、一度始めてしまうと愛国心の名の下にエスカレートし、その終結が遅くなることは過去の例が語っている。

ウクライナは総動員令により、十八歳から六十歳までの男性が戦争遂行のために出国を禁止されて

いる。人を殺し、人に殺されるこ

とを拒否できないということであ  
り、徴兵制は最悪の人権侵害だ。

一方でイスラエルはガザのハマ  
スを殲滅させることを自衛戦争だと  
主張、米国もそれを支持している。

今こそ、自衛戦争とはこういう  
悲惨なものだということを日本国  
民は自覚すべきであり、自衛のた  
めであっても武力を用いる戦争は  
しないと決心すべき時だ。

そのためには、戦争に備えよう  
とする人材と費用をそっくり世界  
の平和のため用いるのである。

そうすれば日本は世界から必要  
とされ、尊敬される国になれる。

自国中心主義を捨てるという理  
想を掲げて、日本が世界に手本を  
見せたい。

## 後記

### 『大規模森林火災』

北米の大規模森林火災は今に始まったこ  
とではないけれど、昨年は比較的少なかっ  
たカナダでも、北米にまで煙害を及ぼすよ  
うな大火が森林火災が発生した。森林火災  
は南米でも、アジアでも増加している。

### 『シベリア永久凍土に巨大穴』

凍ったマンモスの発見で知られる凍土地  
帯だが近年、巨大穴の発生が増えている。  
大きなものは直径百メートル超。深さ八十  
メートル以上のものも、この穴ができるとき  
は地震が起こるものがあるらしい。

凍土地帯は天然メタンの貯留場。凍土が  
それのフタになっているが、北極圏は世界  
平均の二倍ペースで温暖化が進んでいる。  
温暖化でフタが緩み、ガス化したメタンが  
凍土を吹き飛ばした。最近分かった。

因みにメタンは、CO<sub>2</sub>より地球を温暖化  
させる威力がはるかに大きい。

□ □

スペースが足りなくなりました。続きは

次号にて

平澤

和田重正に学ぶ会機関誌『ここに帰る』 第80号  
令和6年1月1日 発行

発行者 〒399-3301 長野県下伊那郡松川町上片桐1352  
和田重正に学ぶ会 平澤 正義

和田重正に学ぶ会ホームページ <http://wadashigemasa.com/>

和田重正に学ぶ会 会費は年二千円 『ここに帰る』バックナンバー お分けします(有料)  
◇◇ 当会活動資金へのご寄付 大歓迎 ◇◇